

ごげん

1

「師走」に師は走らなかつた!?



昔こゝろの暦しよめいで十二月じふにがつを師走しわすと言いいます。師しはお坊ぼうさんのことことで、お経きやうを上げあげるのに西にしへ東ひがしへはせるはせるは（速すみく走まる）月つきなので「しはせ」と言いったのに由来きよらいするとされまります。慌あわただしい年末ねんまつの雰ふん囲い気きが目めに浮うかぶようようですね。でも、この由来きよらいが本ほん当たうかどうどうかは分わかりませません。

シワス（シハス）という言ことば葉はを説せつ明めいするたために、後あとから作つくられた説せつららしいのです。確たたかな根こん拠きよにもとづいて突つき止とめたのではななく、音ねの連れん想そうからこじつけられたのでししょう。よく寝ねるからネコ、足あしをずぼずっと入いれるからズボンなどというのと似にた発はつ想そうです。言ことば葉はの起おこり（語ご源げん）につついては分わかりなないものも多おく、ななかな納なつ得とくの行しやうく証じやう拠こにはたどたり着ちけませません。けれど、日ひ頃ころ使しつつている言ことば葉はが、ななせ生なままれたのか知しりたいといいう人ひと々の思おもいは、ささままな説せつを生なみ出だしてききました。

睦月むつき（一月）は、正ま月はみみんなで睦むつままじく（仲なか良よく）するからとも言いいます。正ましいかどうどうかは別べつとして、昔むかしの人ひとがその言ことば葉はに寄よせた思おもいいが伝つたわわつてくるようようです。



理屈を付けたたり、こじつけたり

「師走」の語源が、僧侶がお経をあげるため、「馳はせる」（駆かける）月つきであるという解かい釈しゃくは、平安時代にはすすでに知しられていまいました。旧曆十二月には、いろいろな仏ぶつの名な前まへを唱なえて、その年としにした悪あくい行ぎやういを悔くい改かめる仏ぶつ名な会かいという行ぎやう事じがありました。僧そう侶りょが忙いそしいのはそのためだといいう理り屈くつを付つけたようようです。

「師走」には、ほかに「年果ねんぐつ」「為果ゐぐつ」など、「果はてる」（終おわる）と関かん連れんづけた語源説ごげんせつもあり、どどれが正ただしいかは分わかりませません。いいずれも、確たかな証しやう拠こがあるわけではななく、主しゆに音ねの連れん想そうからこじつけられた解かい釈しゃくです。このようような解かい釈しゃくを、語源解ごげんかい、民間語源みんかんごげん、通俗語源とくじふごげんなどと言いいます。「くだる」の例れい（211ページ）もそうそうです。

鍋物なべものなどに欠かかせないのがポン酢ぽんすは、もともともとオランダ語おランダごの pons（ポンス＝ダイダイなどかんきつ類るいの搾しぼり汁じゆ）がななまなつたものものです。酸すいっぱいから酢すだ、という語源解ごげんかいから、ポン酢ぽんすと書かれるようようにななつたものものです。

明治時代めいしじだい、初はめて鉄道てつどうが敷しかれたころ、一いっ緒しよにステーションという外がい来らい語ごも入いつて来きました。これをステンシヨすてんしよと発音はつおんし、汽き車しやがとまる所ところだから「ステン所すてんじよ」と解かい釈しゃくして、そう書かいた人ひともいたそうそうです。これも語源解ごげんかいの一種いっしゆでししょう。

ごげん

かんじ

ごみ

ひばん

はつおん

はつおん

はつおん

ごげん